参考文献

＜日本語の「いく」「くる」の文献について＞

日本語の「いく」「くる」の文献については、網羅的な収集を行なった。ただし、以下の文献は、網羅的な収集は行なわず、いくつかの文献を必要に応じて参照するにとどめた。

1. 他言語の「いく」「くる」相当語、または、他言語との対照を主に述べている論考
2. 主に言語習得研究、中間言語研究を扱った論考
3. 古語および方言での本動詞の意味を扱った論考
4. 本文が日本語・英語以外の論考

なお、学会発表については、「日本語学会／国語学会」「日本語教育学会」「日本言語学会」のみを網羅的な収集対象とした。

以下の文献一覧で、「★」を付したものが、日本語の「いく」「くる」の文献である。

＜「文法化」「語彙化」の文献のうち事典類について＞

「文法化」「語彙化」についてまとめる際に参照した事典類は、別に表 42・43 にまとめる。なお、参照したが「文法化」「語彙化」の項目がなかったものは表には入れていない。

秋元実治 2002『文法化とイディオム化』ひつじ書房.
★アラム佐々木幸子 1999「移動方向の発話状況依存性—「てくる／ていく」による移動方向と発話状況中心点との関係の指示」アラム佐々木幸子 編『言語学と日本語教育—実用的言語理論の構築を目指して』pp.177-196, くろしお出版.
★有田節子 2001「日本語の移動構文「V-テクル」についての覚書」『大阪樟蔭女子大学論集』38, pp.1-10.
李善姫 2004「格結合頻度からみた移動動詞の語彙的意味」『日本研究教育年報』8, pp.1-27, 東京外国語大学日本課程・留学生課.
★李延玉 2002a「「テクル」構文の連続性」『日本語・日本文化研究』12, pp.91-104, 大阪外国語大学.
★李延玉 2002b「「テクル」構文について」『STUDIUM』29, pp.33-41, 大阪外国語大学大学院.
★李延玉 2005「「テイク」「テクル」構文について—<開始>と<変化の継続>を中心に—」『STUDIUM』32, pp. 38-51 大阪外国語大学大学院.
★市川保子 1990「「～てみる」「～ておく」「～てくる」の表現意図—話し手の意志表現を中心に—」『日本語教育論集』5, pp.209-228, 筑波大学留学生教育センター.
伊藤雅光 2002「第 3 章　統計的調査法」『計量言語学入門』, pp.31-52, 大修館書店.
伊藤雅光 2003 「コーパスと統計」『日本語学』22-5 (臨時増刊「コーパス言語学」), pp. 26-35, 明治書院.
稲田俊明 1998「第 1 章 生成文法—目標と理念—」田窪行則［他］『岩波講座 言語の科学 6　生成文法』, pp.1-47, 岩波書店.
★井上朋子 2000「「～ていく」の意味変化におけるイメージスキーマとメタファー的写像」『Ars Linguistica』7, pp.1-20, 中部言語学会.
★井上展子 1962「動詞の接辞化—萬葉の「行く」と「来」— 」『萬葉』43, pp.27-37, 万葉学会.
井上優 2009「「動作」と「変化」をめぐって」『国語と国文学』86-11, pp.132-142, 東京大学国語国文学会.
★今仁生美 1990「V テクルと V テイクについて」『日本語学』9-5, pp.54-66, 明治書院.
★岩男考哲 2008「「最近の若者ときたら…」—話者の思考と属性叙述—」『言語』37-10, pp.52-59, 大修館書店.
★岩男考哲 2009「「ときたら」文をめぐって—有標の提題文が意味すること—」『日本語文法』9-2, pp.105-121, 日本語文法学会.
上山あゆみ 2008「内省実験から見える文法」日本言語学会 136 回大会公開講演　予稿集 pp.26-35.
宇都宮裕章 1998「移動動詞と時空間表現について」『Ars Linguistica』5, pp.17-35, 中部言語学会.

★梅岡巳香 1999a「複合動詞「～ていく」「～てくる」をめぐって」『湘南文学』33, pp.156-165, 東海大学.

★梅岡巳香 1999b「「ていく」「てくる」の練習」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』25, pp.71-82.

★大江三郎 1975『日英語の比較研究—主観性をめぐって—』南雲堂.

★大江三郎 1979「「感情移入」にかかわる日本語の特徴－英語との比較を含めて－」『文学研究』76, pp.1-21, 九州大学文学部.

★大島中正 1988「反復継続と漸進の相—シテイクとシテクルの考察—」『同志社国文学』30, pp.21-38.

大谷伊都子 1986「多義動詞の一考察－「だす」「あげる」「たてる」を例として—」宮地裕 編『論集　日本語研究(一)現代語編』pp.361－375, 明治書院.

★大場美穂子 1997「移動を表す動詞「行く・来る」の使用法について」『東京大学言語学論集』16, pp.153-172.

★大場美穂子 2008「補助動詞『いく／くる』の持つ『視点』についての一考察」『相模国文』35.

大堀壽夫 2004「文法化の広がりと問題点」『言語』33-4(特集 文法化とはなにか), pp. 26-33, 大修館書店.

★岡田幸彦 1993「国語辞典の意味記述について—動詞「いく」「くる」の場合—」『拓殖大学日本語紀要』3, pp.124-137.

岡田幸彦 1995 「単語の語彙的な意味の分析のために－多義的な動詞を素材に－」『東京外国語大学　日本語学科年報』16, pp.101-122.

奥田靖雄 1967「語彙的な意味のあり方」『教育国語』8, 教育科学研究会国語部会.[奥田 1984 に所収, pp.3-20]

奥田靖雄 1968-1972「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」『教育国語』12、13、15、20、21、23、25、26、28 [言語学研究会 編 1983 に所収, pp21-149.]

奥田靖雄 1974「単語をめぐって」『教育国語』36 [奥田 1984 に所収 pp.41-51.]

奥田靖雄 1976「言語の単位としての連語」『教育国語』45 [奥田 1984 に所収 pp.67-84.]

奥田靖雄 1977「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」『国語国文』8(宮城教育大学)[奥田 1984 に所収, pp.85-104]

奥田靖雄 1979「意味と機能」『教育国語』58 [奥田 1984 に所収 pp.159-169.]

奥田靖雄 1983「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」[言語学研究会 編 1983 に所収, pp.281-323]

奥田靖雄 1984『ことばの研究・序説』むぎ書房.

奥田靖雄 1988「時間の表現(1)(2)」『教育国語』94, pp.2-17 / 95, pp.28-41, 教育科学研究会国語部会.

奥田靖雄 1993-1994「動詞の終止形」『教育国語』2-9, pp.44-53 ／ 2-12, pp.27-42 ／ 2-13 pp.34-40, 教育科学研究会国語部会.

★奥野忠徳 1993「An Integrated Theory of Coming and Going」『弘前大学教育学部紀要』70, pp.11-20.

尾上圭介 1982「現代語のテンスとアスペクト」『日本語学』1-2, 明治書院[再録：尾上 2001『文法と意味 I』pp.363-387, くろしお出版.]

糟谷啓介 1993「言語学に「言語」は必要か―ことばの学問をだいなしにする張本人はことばです ソシュール「ジュネーヴ大学就任講演」」『一橋論叢』109-4, pp. 539-556, 一橋大学一橋学会.

亀井孝・河野六郎・千野栄一 編著 1996『言語学大辞典 第 6 巻 述語編』三省堂[※「アスペクト」「語彙化」「動詞の種別」「文法化」「有縁関係」「ラング」など]

川端善明 1958「接続と修飾―「連用」についての序説―」『国語国文』27-5, pp.38-64.

北川善久・上山あゆみ 2004『生成文法の考え方 英語モノグラフシリーズ 2』研究社.

★菊地敦子 2004「COME とクルの意味拡張における到達点の違い」佐藤滋・堀江薫・中村渉 編『対照言語学の新展開』pp.27-46, ひつじ書房.

★金美仙 2003「「してくる、していく」のアスペクト性について」『日本研究教育年報』7, pp.21-38, 東京外国語大学日本課程・留学生課共編.

★教科研東京国語部会・言語教育研究サークル 1963『文法教育―その内容と方法―』麦書房.

教科研東京国語部会・言語教育研究サークル 1964『語彙教育―その内容と方法―』麦書房.

金水敏 1994「日本語の状態化形式の構造について」『国語学』178, pp.101-107, 国語学会.

★金水敏 2000「時の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子共著『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』pp.1-92, 岩波書店.

金水敏 2004「日本語の敬語の歴史と文法化」『言語』33-4(特集 文法化とはなにか), pp.34-41.

工藤浩 1985「日本語の文の時間表現」『言語生活』403, p48-56 , 筑摩書房.

工藤浩 1989「現代日本語の文の叙法性 序章」『東京外国語大学論集』39, pp.14-33.

工藤浩 1996 「「どうしても」考」鈴木泰・角田太作編『日本語文法の諸問題』pp.163-192, ひつじ書房.

工藤真由美 1993「小説の地の文のテンポラリティー」言語学研究会 編『ことばの科学 6』pp. 19-65, むぎ書房.

工藤真由美 1995『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房.

工藤真由美 1996「否定とアスペクト・テンス体系とディスコース」言語学研究会 編『ことばの科学 7』pp.81-136, むぎ書房.
★久野暲 1978「第二章 視点」『談話の文法』pp.125-282, 大修館書店.
★グループ・ジャマシイ 編著 1998『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版.
言語学研究会 編 1983『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房.
言語学研究会 構文論グループ 1989a「なかどめ —動詞の第二なかどめのばあい—」言語学研究会 編『ことばの科学 2』pp.11-47, むぎ書房.
言語学研究会 構文論グループ 1989b「なかどめ —動詞の第一なかどめのばあい—」言語学研究会 編『ことばの科学 3』pp.163-179, むぎ書房.
★吴俏华 2007「「－てくる」と「－始める」の置き換え—「－てくる」を「－始める」に置き換える場合をめぐって—」『日本学研究』17, pp.103-112, 北京日本学研究中心.
★江田すみれ 1997「動詞「いく」「くる」の意味と用法について」『日本語教育論文集 小出詞子先生退職記念』pp.319-330, 凡人社.
★小島聡子 1998「「行く」と「来」—源氏物語における用法—」『東京大学国語研究室創設百周年記念 国語研究論集』pp.325-344 , 汲古書院.
★小島聡子 1999「複合動詞後項「行く」の変遷」『国語と国文学』76-4, pp.56-69, 東京大学国語国文学会.
★小杉商一 1970「「やってくる」雑考」『日本語と日本語教育』2, pp.209-215, 慶応義塾大学国際センター.
後藤斉 2003 「言語理論と言語資料—コーパスとコーパス以外のデータ—」『日本語学』22-5 (臨時増刊「コーパス言語学」) , pp. 6-15, 明治書院.
★近藤泰弘 1985「補助動詞「てゆく」「てくる」の用法—〈視点の補助動詞〉研究序説— 」日本女子大学紀要 文学部 3425-34.
★近藤泰弘 2000『日本語記述文法の理論』ひつじ書房.
★坂原茂 1995「複合動詞「V て来る」」『東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要 Language Information Text』2-1, pp.109-143.
★佐久間鼎 1936『現代日本語の表現と語法』厚生閣.
★佐藤幸恵 1992「現代日本語の補助動詞「－(て)くる」「－(て)いく」の働き」『岐阜女子大学国文学会会誌』21, pp.33-51.
讃井唯允 2002「コムリーのアスペクト論と日本語・中国語のアスペクト体系」日中対照言語学会 編『日本語と中国語のアスペクト』pp.67-77, 白帝社.
★澤田淳 2006「「てくる」構文における起動アスペクトについて—認知言語学的アプローチ—」日本言語学会第 133 回大会 予稿集 pp.129-134.
★澤田淳 2008a「「動作の方向性」を表す「テクル」の分析—受動文との比較を含めて—」日本語学会 2008 年度春季大会 予稿集 pp.191-198.

★澤田淳 2008b「日本語の移動動詞の意味変化と継続アスペクト」日本言語学会第 136 回大会 予稿集 pp.426-431.

★澤田淳 2008c「「変化型」アスペクトの「テクル」「テイク」と時間性」『日本語の研究』4-4, pp.63-69, 日本語学会.

島村礼子 1987「「語彙化」について」『津田塾大学紀要』19, pp.155-173, 津田塾大学紀要委員会.

情報処理振興事業協会技術センター (1987)『計算機用日本語基本動詞辞書 IPAL(basic verbs) 辞書編・解説編.

★城田俊 1978「「いく・くる」について『北海道大学人文科学論集』14, pp.135-142.

菅原厚子 1985「単語、その語彙的な意味」『教育国語』80, pp.60-69, 教育科学研究会・国語部会.

★菅原厚子 2001「「いく」と「くる」のつかい方—よみ方指導によせて—」『教育国語』4-1, pp.76-93, 教育科学研究会・国語部会.

★鈴木重幸 1972『日本語文法・形態論』むぎ書房.

鈴木重幸 1979「現代日本語の動詞のテンス」言語学研究会 編『言語の研究』pp.5-59, むぎ書房.

鈴木重幸 2003「解説 現代日本語のアスペクト論(須田義治)について」須田 2003 に所収 pp.259-335.

鈴木重幸・鈴木康之 1983「編集にあたって」言語学研究会 編『日本語文法・連語論(資料編)』pp.3-19.

鈴木智美 2009「「『呼ぶ』と『招く』の意味分析—その多義的意味とコロケーションについて—」」『留学生日本語教育センター論集』35, pp.1-15, 東京外国語大学留学生日本語教育センター.

★須田義治 1995「「してくる」と「していく」」『日本語の研究と教育 窪田富男教授退官記念論文集』pp.92-118, 専門教育出版.

須田義治 2000「限界性について —限界動詞と無限界動詞—」『山梨大学教育人間科学部紀要』1-2, pp.87-94.

★須田義治 2003『現代日本語のアスペクト論』海山文化研究所.

★住田哲郎 2005「ーてくる」の多義構造とその機能性について」『国文学研究ノート』39, 40-54, 神戸大学「研究ノート」の会.

関正昭 1997『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク.

副島健作 1998「現代日本語の不完結相—シツツアルの意味記述—」『日本語科学』4, pp.31-52, 国立国語研究所.

★高橋太郎 1969「すがたともくろみ」教育科学研究会国語部会 文法講座テキスト[再録: 金田一春彦 編 1976『日本語動詞のアスペクト』pp.117-153 , むぎ書房.]

★高橋太郎 1983a「動詞の条件形の後置詞化」渡辺実編『副用語の研究』, pp 293-316, 明治書院.

高橋太郎 1983b「文法研究のために」『国文学解釈と鑑賞』48-6(特集「日本語研究への視点」), pp. p6-15, 至文堂.

高橋太郎 1989a「言語の記述にとって用例とはなにか」『国文学解釈と鑑賞』54-1(特集「「ことば」をあつめる」), pp. p10-15, 至文堂.

★高橋太郎 1989b「動詞　その七・その八」『教育国語』96, pp.68-87／99, pp.43-58, 教育科学研究会・国語部会.

★高橋太郎 2002「「してくる」の意味・用法」日中対照言語学会 編『日本語と中国語のアスペクト』pp.15-40, 白帝社.

★高橋太郎 2003『動詞九章』ひつじ書房.

田窪行則 1997「第 2 章 言語学のめざすもの」松本裕治[他]『岩波講座 言語の科学 1　言語の科学入門』, pp.45-78, 岩波書店.

★竹田和代 2002「出来事の時間移動「てくる」」日本語教育学会 2002 年度秋季大会 予稿集 pp.123-128.

★谷口秀治 2002a「テ形アスペクト形式間の序列性について」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』24-1, 1-9.

★谷口秀治 2002b「テ形アスペクト形式間の対立性について」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』24-2, 229-238.

★田和真紀子 2009「副詞「やうやう」と共起する「Vユク」の意味」 日本語学会 2009 年度春季大会 予稿集 pp.69-76.

★崔淑熹 2005「「－テクル」の文法化についての認知的考察」『社会環境研究』10, 221-227, 金沢大学大学院社会環境科学研究科.

★崔彰完 2003「「－てくる」「－ていく」のアスペクト的な用法について」『日本研究』20, pp.301-310, 韓國外國語大學校外國學綜合研究센터[センター]日本研究所.

★張麟声 1992「「クル・イク」フォームに見る日本語の性格—中国語と比較して—」林四郎編『応用言語学講座　第 4 巻　知と情意の言語学』pp.157-181, 明治書院.

★坪井美樹 2005「テ形接続形式と文法化」『国語と国文学』984, pp.13-25, 東京大学国語国文学会.

★寺村秀夫 1984『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.

★中澤恒子 2002「「来る」と「行く」の到着するところ」生越直樹 編『シリーズ言語科学 第 4 巻 対照言語学』pp.281-304, 東京大学出版会.

★中谷健太郎 2008「テクル・テイクの動詞共起制限の派生」影山太郎 編『レキシコンフォーラム 4　特集 複合動詞と複雑述語』, pp. 63-89 , ひつじ書房.

中溝朋子 2004「「～にしたがって」と「～につれて」」『大分大学留学生センター紀要』1, pp.57-70.

中村明 1977『比喩表現の理論と分類』国立国語研究所報告 57，秀英出版.

成田徹男 1979「動詞の意味と格—「移動」に関する動詞を中心に—」『人文学報』132，pp47-64，東京都立大学人文学部.

★成田徹男 1981a「空間的移動を意味する「ーてくる・ーていく」」『人文学報』146, pp.1-20，東京都立大学人文学部.

成田徹男 1981b「補助動詞と本動詞ー「みる」と「みせる」を例に—」『島田勇雄先生古希記念　ことばの論文集』pp.59-77，明治書院.

西尾寅弥 1977「補助用言」「補助動詞」佐藤喜代治 編『国語学研究辞典』pp.133-134，明治書院.

西尾寅弥 1986「語の有縁性について」『松村明教授古稀記念国語研究論集』明治書院.［再録 西尾 1988『現代語彙の研究』pp.34-50，明治書院.］

仁田義雄 2002『副詞的表現の諸相』くろしお出版.

日本語記述文法研究会編 2008『現代日本語文法 6—第 11 部複文—』くろしお出版.

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 編 2000-2002[1972-1976]『日本国語大辞典 第二版』小学館.［「ゆく」「くる」］

沼田善子 2000「3. とりたて」金水・工藤・沼田 共著『時・否定と取り立て 日本語の文法 2』pp.151-216，岩波書店.

ネウストプニー，J.V. 2002 「第 1 部 総論　1.2. データをどう集めるか」ネウストプニー，J.V.・宮崎里司 共編著『言語研究の方法』，pp.15-33，くろしお出版.

野村剛史 2003「存在の様態—シテイルについて」『國語國文』72-8，pp.1-20，京都大学文学部国語学国文学研究室.

★浜田真理子 1989 「「行く・来る」と「ーていく・ーてくる」の意味の繋がり」『Sophia Linguistica working papers in linguistics』7，pp.47-56，Sophia University[上智大学].

早津恵美子 2000「「もたせる」における使役動詞性のあり方」『日本語 意味と文法の風景—国広哲弥教授古稀記念論文集—』pp.97-114，ひつじ書房.

早津恵美子 2001「日本語における語彙的な意味の単位をめぐって」津曲敏郎編『環北太平洋の言語』第 7 号(文部省科学研究費補助金特定領域研究(A)『環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究』研究成果報告書)pp.219-254.

早津恵美子 2008「人名詞と動詞とのくみあわせ(試論)ー連語のタイプとその体系ー」『東京外国語大学語学研究所論集』13，pp. 43-76.

早津恵美子 2009「語彙と文法の関わり—カテゴリカルな意味—」『政大日本研究』6, 1-70，台湾 政治大學日本語文學系.

早津恵美子 2010「「V」との対応をなさない「V-(サ)セル」—語彙的意味の一単位性—」須田淳一・新居田純野 編『日本語形態の諸問題—鈴木泰先生東京大学ご退官記念論集—』pp.49-65，ひつじ書房.

早津恵美子・中山健一 2010「語彙化(lexicalization)について—事典類の記述の調査と日本語での言語現象—」『コーパスに基づく言語学教育研究報告 5』pp.67-85, 東京外国語大学大学院 コーパスに基づく言語学教育研究拠点.

★日野資成 2001『形式語の研究—文法化の理論と応用—』九州大学出版会.

姫野昌子 編 2004『日本語表現活用辞典』研究社.

★薛鳴 1993「間接話法におけるダイクシスの転換についての考察—「行く」、「来る」を中心に—」『中京短期大学論叢』24-1, pp.155-162.

堀江薫 2002「書評 日野資成著『形式語の研究—文法化の理論と応用—』」『国語学』53-4, pp. 124-131, 国語学会.

★牧内勝 1979「テンス、アスペクトおよびムード—「－ていく」と「－てくる」の文法—」『フェリス女学院大学紀要』14, pp.65-86.

★松下大三郎 1907『漢訳 日本口語文典』[復刻版:『日本語文法研究書大成 漢訳 日本口語文典』勉誠出版, 2004 年]

★松下大三郎 1928『改撰標準日本文法』紀元社.

★松下大三郎 1930『標準日本口語法』中文館書店.

★松田文子・白石知代 2000「「昔話に出てくる鬼」という表現について—「出る」と「出てくる」に関する一考察—」『表現研究』71, pp.1-9, 表現学会.

松村明・三省堂編修所 編 2006 [1988]『大辞林 第三版』三省堂. [「ゆく」「くる」「もどる」「でる」「はいる」など]

★松本知子 2007「Iku and Kuru in Lexical Compound Verbs in Japanese」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』7, pp.1-26.

松本泰丈 1995「「単語・連語・慣用句」」『日本語学』14-5, pp. 29-37, 明治書院.

丸山圭三郎(1985)「ソシュール理論の基本概念」丸山 編『ソシュール小事典』pp.61-90, 大修館書店.

★村田明 2001「本動詞「いく」,「くる」と軽動詞「いく」,「くる」の意味分析」『信州大学留学生センター紀要』2, pp.1-8.

三上章 1953 『現代語法序説—シンタクスの試み—』刀江書院 [復刻:くろしお出版, 1972 年]

★三上章 1970「コソアド抄」『文法小論集』pp.145-154,くろしお出版.

★三上勝夫 1975「補助動詞「ゆく」「くる」の意味と用法」『北海道大学教育学部紀要』25, pp.35-51.

★水谷信子 1985『日英比較話しことばの文法』くろしお出版.

宮城信 2004「少しずつ」構文と進展の意味—「動作の進展」と「変化の進展」—」『日本語と日本文学』39, pp.32-48, 筑波大学国語国文学会.

宮城信 2005「進展的事態の構文と意味—構成的な意味に注目して—」『筑波日本語研究』10, pp.19-35, 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科日本語学研究室.

宮城信 2008「進展表現の分類と副詞の語順」『日本語文法』8-2, pp. 173-189, 日本語文法学会.

宮地裕 1982「慣用句解説」『慣用句の意味と用法』pp.235-265, 明治書院.

★宮島達夫 1972『動詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所報告 43, 秀英出版.

宮島達夫 1977「語彙の体系」大野晋・柴田武 編『岩波講座日本語 9 語彙と意味』pp.1-41, 岩波書店.

宮島達夫 1980「「助動詞」と「補助動詞」」『近代語研究 第六集』pp.455-468, 武蔵野書院.

宮島達夫 1986「格支配の量的側面」宮地裕 編『論集日本語研究(一)現代編』明治書院.[再録：宮島 1994『語彙論研究』pp.437-461, むぎ書房.]

宮島達夫 1996「カテゴリー的多義性」鈴木泰・角田太作 編『日本語文法の諸問題 高橋太郎先生古希記念論文集』pp.29-52, ひつじ書房.

★宮田幸一 1948「第 9 章 動詞の様態」『日本語文法の輪郭』pp.80-95, 三省堂.

村木新次郎 1991『日本語動詞の諸相』ひつじ書房.

メイエ, アントワーヌ[Meillet, Antoine] 松本明子 編訳 2007『いかにして言語は変わるか—アントワーヌ・メイエ文法化論集』ひつじ書房. ※邦訳独自編集

籾山洋介 1992 「多義語の分析—空間から時間へ—」カッケンブッシュ寛子[他] 編『日本語研究と日本語教育』pp.185-199, 名古屋大学出版会.

★森口恒一 1975「「行く」、「来る」、「いる」に関する一考察」『国語国文』44-3, pp.1-13, 京都大学文学部国語学国文学研究室.

★森田良行 1968「「行く・来る」の用法」『国語学』75, pp.75-87, 国語学会.

★森田良行 1977『基礎日本語 1—意味と使い方—』角川書店.

★森本順子 1999「「来る」の領域—対照研究にむけての試論—」『日本語の地平線 吉田彌壽夫先生古稀記念論集』pp.389-400, くろしお出版.

★守屋三千代 1995a「『動詞テ形＋動詞』の構造－アスペクト的観点から見て－」『阪田雪子先生古稀記念論文集 日本語と日本語教育』pp.67-85, 三省堂.

★守屋三千代 1995b「「動詞テ形」の連用機能と末尾動詞との相関—「シテクル」を例に—」『日本語日本文学』5,pp.49-59, 創価大学日本語日本文学会.

森山卓郎 1983「動詞のアスペクチュアルな素性について」『待兼山論叢 文学編』17, p1-22, 大阪大学文学部.

森山卓郎 1984「アスペクトの意味の決まり方について」『日本語学』26, pp.70-83, 明治書院.

森山卓郎 1986「日本語アスペクトの時定項分析」『論集日本語研究(一)現代編』pp.78-116, 明治書院.

森山卓郎 1988『日本語動詞述語文の研究』明治書院.

矢島正浩 2007「補助用言」「補助動詞」飛田良文 編『日本語学研究事典 』pp.203-204, 明治書院.

梁井久江 2003「「ーテシマウ」と「ーチャウ」の相違」日本語教育学会 平成 15 年度春季大会 予稿集 pp.67-72.

梁井久江 2009「テシマウ相当形式の意味機能拡張」『日本語の研究』5-1, pp. 15-30, 日本語学会.

山田小枝 1984『アスペクト論』三修社.

山田忠雄 編集主幹 1972、1974、1981、1989、1997、2005『新明解国語辞典 初版～第 6 版』三省堂. [※「しぬ」の項目]

山梨正明 1995『認知文法論』羊書房.

★山西正子 2005「「-テクル」の表現価値」『目白大学人文学研究』2, pp.131-141.

★山本裕子 2000「「くる」の多義構造—「くる」と「ーてくる」の意味のつながり—」『日本語教育』105, pp.11-20, 日本語教育学会.

★山本裕子 2001「聞き手とベースを共有することを表す「ーてくる」「ーていく」について」『日本語教育』110 , pp.52-61, 日本語教育学会.

★山本裕子 2007a「行為の方向性を表す「～テイク」「～テクル」について—共起する動詞との関係を中心に—」『ことばの論文集—安達隆一先生古稀記念論文集—』pp.338-354, おうふう.

★山本裕子 2007b「<主観性>の指標としての「ーテイク」「ーテクル」」『人文学部研究論集』17, pp.67-81, 中部大学人文学部.

★由井紀久子 1996「日本語動詞の意味の抽象化過程—イク・クル・ミルの意味分析を中心に—」『大阪大学文学部紀要』36, pp.1-28.

湯本昭南 1977「あわせ名詞の意味記述をめぐって」『東京外国語大学論集』27, pp.31-46.

★楊淑雲 1994「「擬態語＋くる」の形式について—「ーする/なる」との比較を通じて—」『国語学研究』33, pp.30-23, 東北大学文学部『国語学研究』刊行会.

★吉川武時 1973「現代日本語動詞のアスペクトの研究」『Linguistic Communications』9, オーストラリア Monash University. [再録: 金田一春彦 編 1976『日本語動詞のアスペクト』pp.155-327, むぎ書房.]

吉川武時 1982「移動動詞」「方向性を持つ動詞」日本語教育学会 編『日本語教育辞典』p.126, 大修館書店.

★吉川正則 1996「「走ってもどって来る」の統語論」『言語科学研究 神田外語大学大学院紀要』2, 49-63.

★吉田妙子 2008「補助動詞の文法化とテ形のアスペクト性」『政大日本研究』5, pp. 29-65, 台湾 政治大學日本語文學系.

★吉村近男 1986「「てくる」構文の「て形」の接続関係」『日本語・日本文化』13, pp.31-49, 大阪外国語大学研究留学生別科.

★吉本一 2002「「行く・来る」と視点」『東アジア　日本語教育・日本文化研究』4, pp.19-33, 東アジア日本語教育・日本文化研究学会.

李丹 2010 「ニ格の名詞と移動動詞とのくみあわせについての考察—連語論の観点から—」『日本研究教育年報』14, pp.41-63, 東京外国語大学日本課程.

★渡辺誠治 2000「「ていく/てくる」の多様な意味の記述に向けて(試論)」『活水日文』40, pp.1-19, 活水学院日本文学会.

★渡辺誠治 2001a「補助動詞「ていく/てくる」の意味記述の試み—アスペクト的側面を中心に—」『さわらび』10, pp.107-117, 神戸市外国語大学・文法研究会.

★渡辺誠治 2001b「「ていく/てくる」のアスペクトに関する覚書」『活水論文集 日本文学科編』44, pp.42-50, 活水女子大学・短期大学.

★渡辺誠治 2005「「テイク/テクル」の分類をめぐって」『活水論文集　現代日本文化学科編』48, pp.84-102, 活水女子大学・短期大学.

★渡辺誠治 2008「日本語の補助動詞「テイク」「テクル」について(その 1)—「テイク」のアスペクト性を中心に—」『活水論文集 現代日本文化学科編』51, pp.67-90, 活水女子大学・短期大学.

Bauer, Laurie. 1983. *English Word Formation*. Cambridge University Press.

Bloomfield, Leonard. 1933. *Language*. Holt. [邦訳：三宅鴻・日野資純 訳 1962『言語』大修館書店.]

Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. Cambridge University Press. [邦訳：山田小枝 訳 1988『アスペクト』むぎ書房.]

Comrie, Bernard. 1998. 'Perspectives on Grammarticalization.' in Ohori, Toshio ed. *Studies in Japanese Grammaticalization*, pp.7-24, Kurosio.

Helbig, Gerhard und Joachim Buscha. 1977. *Deutsche Grammatik : Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. Verlag Enzyklopädie. [邦訳：在間進 訳 1982『現代ドイツ文法』三修社.] ※筆者は、原典を読んでいない。

Hopper, P.J. and E.C. Traugott. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge University Press. [邦訳：日野資成 訳 2003『文法化』九州大学出版会.]

★Lee, Kiri. 2000. 'Crossing the Uchi/Soto Boundary—The Case of Verb -te kuru in Japanese—' *Journal of the Association of Teachers of Japanese (JATJ)* 34-1, pp.25-43.

Lehmann, Christian. 1995[1982]. *Thoughts on Grammaticalization: Revised and expended version*. LINCOM Europa.

Leisi, Ernst. 1953. *Der Wortinhalt : seine Struktur im Deutschen und Englischen*. Quelle & Meyer. [邦訳：鈴木孝夫 訳 1971『意味と構造』研究社出版.] ※筆者は原典を読んでいない。

Lipka, Leonhard. 1990. *An Outline of English Lexicology: lexical structure, word semantics, and word-formation.* Max Niemeyer Verlag.

Martinet, A. 1970[1960]. *Eléments de Linguistique Générale.* Librairie Armand Colin. [邦訳：三宅徳嘉 訳 1972『一般言語学要理』岩波書店.]

Matthews, Peter Hugoe. 1997. *The concise Oxford dictionary of linguistics.* Oxford University Press. [邦訳：中島平三・瀬田幸人 監訳 2009『オックスフォード言語学辞典』朝倉書店. ※邦訳の「語彙化」「直示」「文法化」などを参照.]

Meillet, Antoine. 1912. 'L'évolution des formes grammaticales.' *Scientia (Rivista di Scienza)* 12-26. [Reprinted in Meillet, A. 1965. *Linguistique Historique et Linguistique Générale.* pp.130-148, Librairie Honoré Champion.]

Sapir, Edward. 1921. *Language : an introduction to the study of speech.* Harcourt, Brace and Company. [邦訳：安藤貞雄 訳 1998『言語—ことばの研究序説—』岩波書店.]

Saussure, Ferdinand de. 1916. *Cours de linguistique generale.* [邦訳：小林英夫 訳 1972『一般言語学講義(改版)』岩波書店.] ※ただし、著者は邦訳のみ参照した。

★Shibatani, Masayoshi. 2003. 'Directional verbs in Japanese.' in Erin Shay and Uwe Seibert eds. *Motion, Direction and Location in Language.* pp.259-286, John Benjamins.

Talmy, Leonard. 1996. 'Fictive motion in language and "caption."' in Bloom, Paul, Mary A.Peterson, Lynn Nadel, and Merrill F. Garrett eds., *Language and Space,* pp.211-276, MIT Press.

Vendler, Zeno. 1967[1957]. 'Verb and times.' *Linguistics in Philosophy*, pp.97-121, Cornell University Press.

以下に、「文法化」(第 14 章) ・「語彙化」(第 15 章)に関する調査にて参照した辞典/事典を挙げる(「文法化」「語彙化」以外の項目も参照した辞典/事典については、上記文献リストと重複する)。

表 42 :「文法化」「grammarticalization」が立項されている事典

書名	編著者　など	出版者	出版年	ページ	項目執筆者
ラルース言語学用語辞典 [原題 : Dictionnaire de linguistique]	Dubois, Jean [ほか] 著／伊藤晃 [ほか] 編訳	東京 : 大修館書店	1980 [原 1973]	pp.360-361	明記なし
Routledge dictionary of language and linguistics [原題 : Lexikon der Sprachwissenschaft, 2nd completely revised edition.]	Bussmann, Hadumod 編／Trauth, Gregory ; Kazzazi, Kerstin 訳	London : Routledge	1996 [原 1990]	p.196-197	明記なし
International encyclopedia of linguistics	Bright, William 編集主幹	New York ; Oxford : Oxford University Press	1992	vol.2: p.79-81	Hopper, Paul J.
The Encyclopedia of language and linguistics	Asher, Ron E. 編集主幹	Oxford : Pergamon Press	1994	vol.3: pp.1481-1486	Traugott, Elizabeth Closs
言語学大辞典 第6巻 術語編	亀井孝 ; 河野六郎 ; 千野栄一 編著	東京 : 三省堂	1996	pp.1193-1196	明記なし
A student's dictionary of language and linguistics	Trask, Robert Lawrence 著	London : Arnold	1997	p.99	著者
オックスフォード言語学辞典 [原題 : The concise Oxford dictionary of linguistics]	Matthews, Peter Hugoe 著／中島平三 ; 瀬田幸人 監訳	東京 : 朝倉書店	2009 [原 1997]	p.321	著者
認知言語学キーワード事典	辻幸夫 編	東京 : 研究社	2002	p.231	井上逸兵
Encyclopedia of linguistics	Strazny, Philipp 編	New York : Fitzroy Dearborn	2005	vol.1: 402-404	Heine, Bernd
The Encyclopedia of language and linguistics, 2nd ed.	Brown, Edward Keith 編集主幹	Amsterdam : Elsevier	2006	Vol.5: pp.129-136	Wischer, I

(原著出版年順)

表 43：「語彙化」「lexicalization」が立項されている事典

書名	編著者　など	出版者	出版年	ページ	項目執筆者
ラルース言語学用語辞典 [原題：Dictionnaire de linguistique]	Dubois, Jean [ほか] 著／伊藤晃 [ほか] 編訳	東京：大修館書店	1980 [原 1973]	pp.138-139	明記なし
Routledge dictionary of language and linguistics [原題：Lexikon der Sprachwissenschaft, 2nd completely revised edition.]	Bussmann, Hadumod 編／Trauth, Gregory；Kazzazi, Kerstin 訳	London：Routledge	1996 [原 1990]	p.279	明記なし
The Encyclopedia of language and linguistics	Asher, Ron E. 編集主幹	Oxford：Pergamon Press	1994	Vol.4: pp.2164-2167	Lipka, Leonhard
言語学大辞典 第6巻 術語編	亀井孝；河野六郎；千野栄一 編著	東京：三省堂	1996	pp.514-515	明記なし
A student's dictionary of language and linguistics	Trask, Robert Lawrence 著	London：Arnold	1997	p.130	著者
オックスフォード言語学辞典 [原題：The concise Oxford dictionary of linguistics]	Matthews, Peter Hugoe 著／中島平三；瀬田幸人 監訳	東京：朝倉書店	2009 [原 1997]	p.112	著者
認知言語学キーワード事典	辻幸夫 編	東京：研究社	2002	p.72	井上逸兵
言語の事典	中島平三 編	東京：朝倉書店	2005	p.51	伊藤たかね
Encyclopedia of linguistics	Strazny, Philipp 編	New York：Fitzroy Dearborn	2005	vol.1: 622-623	Inchaurralde, Carlos
The Encyclopedia of language and linguistics, 2nd ed.	Brown, Edward Keith 編集主幹	Amsterdam：Elsevier	2006	Vol.7: pp.106-108	Bakken, K

(原著出版年順)

以　上